

走り読み文学探訪リバイバル(その1)

「遙かなるセントラルパーク」 著者トム・マクナブ、飯島宏訳

原題：Flanagan's Run by Tom MacNab

文春文庫 1986. 8. 25 上:544円, 下:544円 (執筆当時)

紹介者：榎本博康

〔はじめに〕

皆さんもマラソン大会へ向かう電車の中で、本を読むことがあると思います。そんな時に最適なランニングに関連する文学を、これから何回か紹介したいと思います。第1回は、私が最も好きな小説です。

〔紹介〕

1931年3月21日、ロスアンゼルスから、約2,000名のランナーがスタートした。目指すはニューヨーク、3,146マイル220ヤード(約5千km)の大レースである。参加料は200ドルで、賞金は1位15万ドルから100位の200ドルまで総額36万ドル。率いるはチャールズ・C・フラナガン、決してへこたれない興行師である。

さて、ここで主要なランナーを紹介しよう。まずドク・コール、54歳、米国。孤高にして天性のプロ長距離ランナーであり、チッカモーガというあやしげな強壮薬を売って糊口をしのいでいる。彼は以下のメンバーとチームを作り、このレースを制覇しようとする

次はヒュー・マクフェイル、スコットランドからで、30歳代。造船所リベット工から炭坑夫。貴族と一騎打ちのスプリント(短距離走)で勝つが、それがあだとなって炭坑を去るはめに。

マイク・モーガン、米国、30歳代。鉄鉱労働者だったが、ストライキ指導でクビに。生活のための賭けボクシングで相手を殺してしまう。

ピーター・サーレイ卿、イングランドからで30歳代。貴族仲間と6位以内で10万ポンドの賭けをし、アマチュア資格を捨てて参加。しかし、破産の知らせが。

ケイト・シェリダン、20歳代、ニューヨークの踊り子。毎晩踊り続けて週20ドルの生活に疲れた。運動競技歴なし。女性の完走が不可能視された中で健闘。

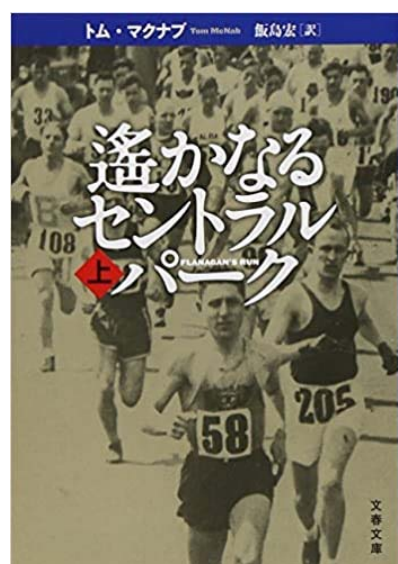
ホアン・マルチネス、メキシコ、19歳。村の飢餓を救うために、撰ばれて村民の共同出資と借金で参加。

さて、あとは本を読んでものお楽しみ。馬対人間レースとか、とんでもない展開が存分にある。

〔感想〕

この話は一見荒唐無稽だが、1928年に実施された史実に基づき、また近年は高石ともや氏や海宝氏が活躍した、トランスアメリカフットレース開催のきっかけになっている。そして何よりのリアリティは、その走りの描写である。各人のスタイルを見てみよう。

ドクは経験に裏打ちされた、卓越したペース配分と緩急自在の走力。ヒューは腿上げの低い、省エネ走法。体重70kgのモーガンも足を滑らすような走法。サーレイはアマチュア出身らしい、



腿を上げた端正な走り。若いマルチネスは腿の高いストライドで力強い印象の走りである。この描き分けはすごい。

また、アマチュア問題を考えさせてくれる。スポーツが貴族のものとされていた時代の話だ。さらにステートアマであるナチスチームが超人的な走りをするが、ドクらの寄せ集め個人チームが対抗する。

チームと言えば、マラソンは孤独な競技だが、ウルトラはひとりでは走れない。そのようなウルトラマラソンの心が、読者に素直に伝わってくる。しかも超ウルトラゆえに、ケイトのような経験の無いランナーでも、引っ張られて走りながら成長し、そして賞を手にすることができた。

参加者は賞金が欲しい。だが、過去のしがらみを離れて3ヶ月間のランニングに専念することで、人生との向かい合い方に変化が生じる。これは、それまでの人生を第一章とすれば、次の第二章にはばたく準備の、まゆである時間を、この超ウルトラ走の間に経験するのだ。例え中年間近であっても、新たな自分を自分自身で生み出す奇跡を自己のものとする、心の成長記録でもある。

この話の中では下位ランナーはほとんど取り上げられないが、何と800人以上が完走する。多くは賞金とは無縁の等外ランナー達だ。賞金に手が届かないと分かってからも、このレースの完走に賭けた無名のランナー達に、書かれていないからこそ、私は自分を仮託することができる。

ゴール後も、主人公達は日常生活の中で走っただろうか。それは述べられていない。ただドクだけは、84歳の時にフルを走ったという。これこそが、私の望む結末である。

(1997. 3. 20)

[リバイバル感想]

現在は上巻740円+税、下巻750円+税であり、時の経過を感じる。執筆当時にはSM子さんやKS子さんが世界を股にかけて走っていた。当時サラリーマンであった私には到底かなわぬ夢を代弁ならぬ、代走して下さったと感謝している。

この小説では、たまたま人生の転機を迎えた人々が人生への向かい合い方を模索し、ゴール後に再出発するという構成である。図式化すれば、「旧人生（自己喪失、芋虫）→大陸横断走（化学変化、まゆ）→新人生（あるべ自己、蝶）」となる。しかし私の知っている走友達は「走る日常」の実践者であり、前向きに生きるための力の源泉にしていると感じる。走る日常であるからこそ、この小説で走る非日常を疑似体験する意味があるだろう。

所で私の大切な走友であった、don McNelly (1920. 11. 11~2017. 2. 05) 氏は89歳で744回のマラソンとウルトラを走り、90歳の誕生日直後のレースで745回めの完走を目指したが、かなわなかった。この小説が書かれた当時はドク84歳のマラソンはドリームであったかもしれないが、ドンはそれを超えた。できれば私はドンの果たせなかった夢、90歳での完走を目指したい。

所で2011年10月16日の22nd Toronto Waterfront Marathon に参加したが、そのレースに100歳のインド系英国人、Singh Fauja氏が8:25:16(N8:11:05)、3,845位で完走したとの記録がある。私は折り返し後にすれ違う、後続の彼を見ることができなかった。十人程度が彼を囲んでいたのも、本人らしき人物が全く見えなかったのである。現在、その時の大会ホームページを見ると、ゴール間近でしっかりと走っている氏の複数の写真を確認することができる。またwikipediaによれば、1911年4月1日生まれの彼は109歳で健在である。最後のマラソンはLondon

Marathon 2012 : 7:49:21とある。この年は4月22日の開催なので、101歳でのマラソン完走ということになる。

(2020. 5. 30)